

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2013～2015

課題番号：25301017

研究課題名(和文)ロシア先住民族の現代政治的な諸相に関する実地調査 シベリア・極東の地域主義の台頭

研究課題名(英文)Field research about the political various aspects of Russian-Siberia indigenous people

研究代表者

中村 逸郎 (NAKAMURA, Itsuro)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：40326400

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究ではロシアのシベリア・極東の各地を訪問し、多数の先住民族と面会、インタビューを実施した。とりわけ、従来の日本研究者だけではなくロシア研究者もほとんど訪問したことのない辺境地にまで訪れ、政治意識、宗教・文化について様々な観点からかれらの日常生活の実態を浮き彫りにした。これらの調査結果で判明したことは、プーチン政権下で中央集権体制が強化されている一方で、モスクワから遠くに離れた地域にはプーチン政治と様相を異にする状況が醸成されていることである。

研究成果の概要(英文)：I visited Siberia in Russia and Far Eastern all part by this research, met a lot of indigenous people and interviewed. I even visited in the frontier place where I have no cases that I called on conventional Russian researcher as well as Japanese researcher above all almost all, too and made the reality of his daily life stand out from political consciousness and the point of view various about religion and culture.
The centralization of power system has been strengthened under the Putin political power, but also the thing revealed by these survey result is the case that the situation that I differ from Putin in the aspect is brewed in the area left far from Moscow.

研究分野：ロシア現代政治

キーワード：ロシア政治、ロシアの民族、ロシア正教会、ロシアのイスラム教、シベリアのシャーマニズム、シベリアの仏教、シベリアの天然資源、シベリアの文化

1. 研究開始当初の背景

世界の多くの国が多民族国家であり、ロシアもそのひとつの国であるが、その数と人口は世界最大級といえる。ロシアがとりわけ特徴的なのは、主民族であるロシア人以外の民族の多さである。その正確な数は不明であるが、100以上を数えるといわれている。なかでも先住民族は45民族といわれ、シベリア・極東には28の先住民族が暮らすという推測もある。

先住民族の社会生活実態については、日本だけではなくロシア国内でも本格的に調査されていない。というのも、先住民族の多くはトナカイ飼育業を営む遊牧生活をおくり、住居登録を行っていないケースが多いからである。またいくつかの先住民族は山岳地帯で狩猟生活を営み、ロシア人がたどり着くのは容易でない森林の奥深くで生活しているからである。

だから、ロシア国内で先住民族をテーマにする研究は極めて少ない。モスクワ市内の書店だけではなくシベリアの都市の書店を回っても、シベリア少数民族についての書物は皆無である。見つけることができるものといえば、概論的な歴史を記述するものが中心で、その視点はロシア人が帝政ロシア時代、どのように国土を拡大し、先住民族と戦い、支配していったかを考察している。つまり、ロシアの視点から、シベリア征服の歴史を記述しており、少数民族を内在的に論じた研究はないのが実情である。

ロシア国内の一般的な民族問題の研究といえば、先住民族に特化するものが少ないかわりに、ロシアと諸民族の関係を研究が主流で、大きく二つに分類できる。

一つは、ロシア国家の言語政策に焦点をあてている。ロシア政府が諸民族をロシア化するために、ロシア語教育をとおしてどのようにロシア国家制度に統合してきたかを論じている。ロシアは多民族国家であると同時に、多言語国家である。諸民族にロシア語教育をほどこすことで、かれらをロシア化するメカニズムを解明しようとする研究が多い。

もう一つの研究は、ロシア国内の民族紛争に関わる研究である。ロシア南部に位置するチェチェン共和国をめぐる民族紛争が中心である。イスラム教徒の多いカフカース地方とロシア人の関係を検討しているが、研究成果は概説のレベルにとどまっている。具体的な実地調査をもちこんだ紛争研究はとて少ない。

2. 研究の目的

本研究のねらいは、シベリア・極東にすむ28の先住民族(ロシア人が移住するに先立って住んでいる人びと)の社会実態を現地調査し、ガバナンス・アクターとして政治的な機能を担いはじめている現状を解明することであった。

ロシアはイワン雷帝の時代からシベリア

という辺境を抱え込むようにして、領土拡大と資源開発を行ってきた。地球の二酸化炭素の吸収源ともいわれるタイガや地球温暖化のパロメーターでもあるツンドラは単に天然ガスや木材の宝庫であるだけでなく、多くの文学者、芸術家に大きな影響を及ぼしたところである。

先住民族の多くはロシア連邦制度の枠外に独自の自治組織を形成しており、その伝統的な共同体の実態を解明することにあつた。先住民族といっても、人口が2万人規模の民族もいれば、200人ほどの小規模の民族もあり、かれらの自治組織も多様である。かれらは集落ごとに集団で住んでいたり、または親戚が結集して家族集団を構成していたりする。かれらの自治組織は自分たちの仕事(トナカイ飼育業、漁業、林業等)に深くかかわっており、首長が自治組織を統率している。その長の選出方法をはじめとして運営の実態と慣習、さらには共同体の上級組織、外部組織との関係を調査した。

近年、天然資源開発が進むシベリア・極東は世界的に注目されている。ロシア政府はこれらの地域を外交戦略の重要拠点と位置づけ、支配権を拡大している。しかし、この地域には多数の先住民族が住んでおり、土地を固有のものと捉えている。一部の民族は資源輸出の見返りとして経済的利益を要求し、政治的な発言力を強化している。かれらは積極的にシベリア・極東にすむロシア人と連携し、シベリア自治権の拡大を求めている。

他方で一部の民族は資源開発に抵抗し、伝統的な生活様式を堅持しようとしている。これらの先住民族の動向は、たんにロシア国内のほかの民族を刺激するだけではない。シベリアの天然資源の獲得に乗り出す日本を含むアジア諸国、さらには欧米先進国にも大きな影響をあたえる。

本研究の目的は、シベリアに迫るグローバルの潮流に対してシベリアの少数民族がどのように対応しているのか、実態を解明することにあつた。

3. 研究の方法

本研究を実施するために、研究期間の3年間にわたって先住民族が住むロシア各地を訪問した。なかでもシベリア、極東の天然資源開発地の周辺地を訪問し、先住民族に直接面会し、インタビューを実施した。これと並行して、かれらの居住地を管轄するロシア連邦機関の行政機関と天然資源開発を推進する企業の担当者に面会し、当事者のかれらにインタビューし、研究に必要な基礎的な情報を入手できた。

そのうえで、当事者たちの証言を裏づける一次資料を手に入れた。従来文献は概説にとどまっていたので、一次資料の価値はきわめて高く、研究の実証性を担保できた。このように現地で入手する証言と資料を用いて、本研究では具体的な論点を提起した。

本研究はあくまでもロシア論なのであるが、ただロシアを論ずるにあたって、そのメインストリームではなく、シベリアという地理的な辺境、非ロシア人の少数民族、非正教徒のイスラム教や仏教、シャーマニズム、そして正教徒のなかでも異端派などにあえてフォーカスすることによって、いわばそこから逆照射するような形でロシアというものの本質を浮かび上がらそうと試みた。

4. 研究成果

本研究の成果として、ロシアはモスクワを中心に欧米化が進行しており、この視点からのロシア研究を相対化することができた。つまり、モスクワなどのヨーロッパ・ロシア地域ではないウラル山脈の東方に広がる苛酷で広大なシベリアの底知れないエネルギーを抱えてこそ、ロシアという国家は成り立っていることを実証的に結論づけることができた。このエネルギーの源泉となっているのが、シベリアの少数民族なのである。

シベリア極北の少数民族のネネツ人の村を訪問したさい、国内パスポート（住民登録書）に「住所はツンドラ」と表記するトナカイ遊牧民に出会った。現実には住所がつけられていないシベリア極北で生活する少数民族は正式な国籍を得ているといえない。一般的に国籍を有することで、ロシア人は国民としてロシア憲法に明記されている権利、たとえば選挙権や教育、福祉を享受する権利が発生し、同時に納税などの義務を負う。このような権利と義務が発生するのは、現住所が定められていることが法的な根拠となるが、ネネツ人をはじめとするシベリア極北の少数民族はロシア国内に居住しながら、ロシア国民と扱われていないことが判明した。

いまでも活躍するシベリア各地で活躍するシャーマンたちは、少数民族の精神的な支柱と成っている。シベリアの少数民族にとってシャーマンは先祖からの土着宗教であったが、ロシア帝政時代に推進されたロシア化と近代化で少しずつ消失していったところが多いといわれている。そして、ソ連時代の無神論政策で決定的に破壊されてしまったといわれることが多い。この一方で、トゥヴァー共和国は例外的にシャーマニズムを色濃く残しており、シャーマンによる民間療法は絶大な人気を誇っていることが明らかになった。

西シベリア各地に広がるイスラム教徒（タタール人など）は、先住民としての自負心を抱きながらも、ロシア人の葛藤を抱えている。タタール人が秘めるロシア民族主義団体への慟哭を、西シベリアのパーイシェフスカヤ村の人びとから感じとった。ただかれらの忍耐は自分たちの村に押し寄せるロシア人にむけて怒りを暴発させることなく、どこまでも自制をはたらかせている。ロシア人との一定の距離感をはかることを最優先にして、かれらと共存しようと模索していることがわ

かった。

シベリアの山岳地帯やバイカル湖東方地帯に仏教徒の少数民族が多数住んでいることがわかった。仏教といっても、チベットやモンゴル、インドの仏教と比較すると、独自性を有し、欧米社会の仏教とはいかなる接触もなかったことが大きいようである。このためにシベリアの仏教は多元性を説き、ロシア正教会やシャーマニズムとの共存をはかっていることが明らかになった。シャーマニズムの伝統や風習を取りこむことによって、仏教は民衆のなかに少しずつ浸透していったのである。

このような多様性を尊重するシベリアではロシア正教会をはじめとしてイスラム教のモスクや仏教寺院、ユダヤ教のシナゴーガをはしごかる人びとたちの実態が浮き彫りになった。シベリアの移住したロシア人までも、いわば「シベリア化」してしまったのである。

ところが、ここにはチベット仏教も根を張っており、実はロシア正教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒が自らにとっての「二つ目の宗教」として仏教を受け入れるケースが多いのだそうだ。

複数の宗教が奇妙に共存し、ザバイカル地方の中心地チタはキリスト教、ユダヤ教、イスラム教が隣り合わせに共存し、「第2のエルサレム」とも称されている。

シベリアとモンゴルの国境に近い山岳地帯には何百年も周囲との関わりを絶った旧教徒のロシア人が住む集落があり、訪問することができた。古儀式派とは1666年から67年にかけてのニコン総主教が主唱するロシア正教会の改革に反対したロシア人のことである。ニコンは世界標準の祈祷方式にあわせることで、モスクワを「第三のローマ」として生き変えさせようと試みた。数百万人の正教徒は抑圧を恐れて、シベリアへと逃げこみ、人里から遠くに離れた辺境地に飛散した。いわば「世捨て人」のように世俗との関係を断ちきり、自己完結した小世界に閉じこもった。いまでも17世紀以前の古いロシアの伝統文化にもとづいて生活しており、男性は口ひげとあごひげをはやし、女性はプラトークで頭をおおい、肌に十字架のペンダントをつける。トゥヴァーの小エニセイ川の上流に古儀式派のロシア人が身を隠すように住んでいることを知った。

さらにドイツから18世紀に移住したドイツ人のゴレーンドル人の集落も訪問することができた。ゴレーンドルのひとたちはながい間、ドイツ人のファミリー・ネームを維持し、外界のひとたちと交流することは少なかった。ロシア人をはじめとしてほかの諸民族と結婚もとてもめずらしく、多くの場合に親族内の結婚が多発した。結果的に伝統的な生活様式を存続させることができたのである。

本研究で取り上げた事象やエピソードの一つ一つは、わたしたちが現代社会の生活で

知らず知らずのうちに自明視している近代国家制度や近代技術の束縛を浮かび上げる同時に、それらにとられない生き方の可能性を示すことができた。

プーチン政権下でロシア愛国主義が席卷するロシアにあって、シベリアはあまりにも多様で政治的に自由、豊かで柔軟な文化を築きあげていることがわかった。ロシアのなかにシベリアがあるのではなくシベリアの多様性のなかにロシアがあることがわかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

中村逸郎 書評「誰にも従属しない『ロシア』がここに」「アエラ」2016年5月16日号、査読有、2016年、70頁

[図書](計1件)

中村逸郎著『シベリア最深紀行 知られざる大地への七つの旅』岩波書店、2016年2月、205頁

[その他](計2件)

中村逸郎 書評「辺境に息づく多様な精神文化」朝日新聞、2016年3月27日朝刊、16面

中村逸郎 書評「厳しい気候の中の強い人々」日本経済新聞、2016年3月20日朝刊、21面

6. 研究組織

(1)研究代表者

中村 逸郎 (NAKAMURA, Itsuro)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：40326400